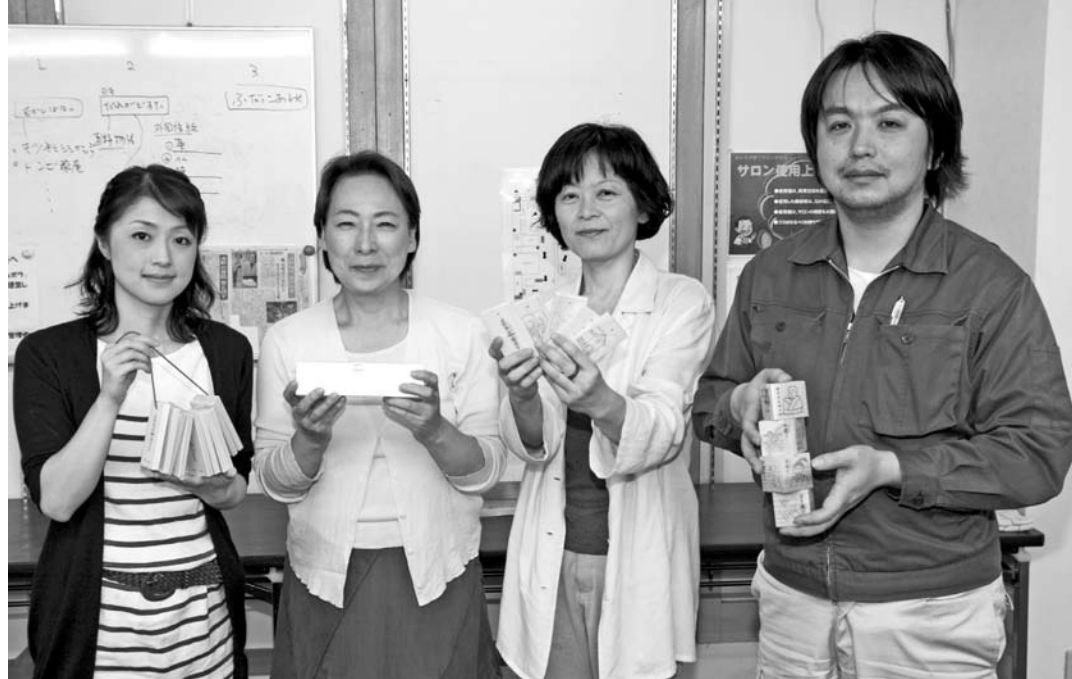


『遠野物語』に親んでもらおうと、市内の二つの団体が、子どもたちにプレゼントを贈りました。



(左から)松田希実さん、前川敬子さん、徳吉敏江さん、豊田純一郎さん

木の触感で『遠野物語』を感じて

【もくもく絵本研究所】

「木に触れて遊び、触感で『遠野物語』を感じてもらいたい」。合同会社もくもく絵本研究所(前川敬子代表)は、遠野物語発刊100周年を記念して、木の絵本「だれがどすた?」と、木の絵札「ふだっこあわせ」の遠野物語版を製作。市内の小学校と保育園・幼稚園に5月から順次贈呈を開始した。

5月12日、青笹小を訪れ、4年生へプレゼントしたときのこと。「もう一回!」と何度も遊ぶ子どもたちと『遠野物語』の距離が近づいていくのを感じました」と話すのは前川代表。

同研究所は、木製の玩具を子どもたちに与えたい、遠野の民俗文化を次世代につなげたいという想いを持った職業も立場も違うメンバーが平成16年に結成。事務所も作業場もない中、所員全員が協力し完成させたのが「木の絵本」。一辺5センチのサイコロ、4個で一セット。「誰が」「どこ」「何を」「どうした」を絵

と言葉でデザインし、組み合わせるとたくさんのお話ができる。絵のデザイン、データ化、木材の調達、レーザーでの焼き付け、販売など、すべて4人でこなす。「だれがどすた?」は「遠野三山」や「ヨイガ」など子どもたちが分かりやすく、親しみやすい6話を選択。トランプの神経衰弱のように遊ぶ「ふだっこあわせ」は、オシラサマやカッパ、てんぐなど『遠野物語』でおなじみの5話を選択。どちらも『遠野物語』を知るきっかけにしてもらいたいと製作した。「今は楽しんで遊んでもらうだけ。『遠野物語』が理解できなくても、いつか興味を持つはず」と話す。

遊んでいる時に響く木の音から温もりを感じてほしい。遠野の木で、遠野のことを伝えたい。言葉や話の内容から色やさまざまな選択肢を連想する力を付けてほしい。「絵本」と「ふだっこ」には、たくさんのお話が込められている。



木の絵札「ふだっこあわせ」に夢中の青笹小の子どもたち



◀「木の絵本」(左)と「ふだっこあわせ」の遠野物語版

『遠野物語』をたくさんの人に

【遠野郷朗読ボランティアかりん】

一人一人の個性あふれる朗読。温かみのある挿絵。物語にびつたり音楽や絵の演出効果!。

遠野郷朗読ボランティアかりん(奥寺恭子会長、会員10人)は、結成10周年と遠野物語発刊100周年を記念して、遠野の昔話を収録したDVDを制作した。「予想していた以上の出来栄えにびっくりしています。たくさんの人たちに支えられて完成できました。本当に感謝しています」と奥寺会長は話す。

同会は、県が主催した朗読ボランティア養成講座の受講者が集まり、平成12年に結成。以来毎月広報遠野を全ページ朗読し、テープに録音。市内の視覚障がい者7人に送っているほか、遠野テレビでも放送されている。「声には読み手の気持ちが表示」と、収録日にはみんなでおやつや弁当を持ち寄り、和気あいあいとした雰囲気での自分の出番を待つ。夫婦が登場する「ともに歩んで半世紀」のコーナー

は、聞き手役と夫婦役の三人の掛け合いで収録するなど、聞きやすさを第一に考えている。「それぞれの声や人柄に合った朗読の分担になっている」と、利用者からも好評だ。

制作したDVDは全73分。遠野ユネスコ協会の「どうわこども遠野ものがたり」から、一人一話ずつを選び朗読。挿絵を市内の画家らに依頼し、編集は遠野テレビに委託した。

完成した作品はテープの利用者のほか、幼稚園・保育園、小・中学校、福祉施設へ寄贈した。「『遠野物語』の入門編として、先人から伝えられてきた遠野の宝を、子どもたちにも感じてほしいですね」と奥寺会長は目を細める。

「障がいがある人も住民の一人として行政サービスを受ける権利があるんです。できる範囲でそのお手伝いをしたい」と事務局の山賀洋子さん。今月も和気あいあいと収録に臨んでいる。

▶設立10周年記念作品DVD「どうわこども遠野ものがたり」



5月12日に開いた10周年祝賀会で、利用者にDVDを手渡す奥寺会長(左)



(前列左から)山賀洋子さん、奥寺恭子さん、伊藤弘美さん
(後列左から)菊池千代子さん、佐々木君恵さん、刈谷香子さん